

## 会長の時間 第 24 回 子ども食堂と SDGs

日出ロータリークラブ

会長 加賀山 茂

### はじめに

これまでの会長の時間で、私は、ロータリークラブの基本的な理念について、「四つのテスト」の意味（第 1 回）、「ロータリーの目的」の意味（第 2 回）、「五大奉仕部門」（第 3 回）、「公平とは何か」について、タクシーの相乗りの場合の料金の公平な負担について検討させていただき（第 5 回）、「微笑みを微笑みで返す」とか「いただいたら、お返しする」とかという共感脳の抱える「やられたら、やり返す」というジレンマ（第 6 回）、偽りの親睦と四つのテストの関係（第 7 回）、新型コロナウイルス感染症対策（第 8 回）、善行とは何か（第 9 回）、善行褒章とその基準（第 10 回）、善行褒章基準の日独比較（第 11 回）、子ども食堂（第 12 回）、地方創生（第 13 回）、コロナ禍における国民の三大義務の支援（第 14 回）、機会の三つの扉の応用（第 15 回）、前期の反省と後期の抱負（第 16 回）、今年度後期の抱負と提案（第 17 回）では、Web 例会の可能性について話し、前回には、日出ロータリークラブが、近隣のクラブに先駆けて対面とリモートを併用したハイブリッド例会を実現した意義、SDGs と日出ロータリークラブとの関係（第 19 回）について、オンライン会議を紹介したのを契機に、Zoom の使い方（第 20 回）、日出町で問題となっているムスリムの墓地の問題（第 21 回）、子どもの能力と善行褒賞（第 22 回）、地方創生と SDGs（第 23 回）について、話しました。



そして、いずれの回においても、本年度の RI 会長（Holger Knaack 氏）のテーマである「ロータリーは機会の扉を開く」を活用させていただき、3つの扉の色に即して、**赤い扉**は、「親睦（和らぎ睦び）」として、**黄色の扉**は、「職業倫理の向上」として、**青の扉**は、「次世代への奉仕活動の実践」として整理させていただきました。

今回は、IM の話題と関係する子ども食堂について、話したいと思います。

## 1. ロータリークラブの哲学としての「超我の奉仕」について

### (1) 「超我の奉仕」とは何か —管理社会から支援社会へ—

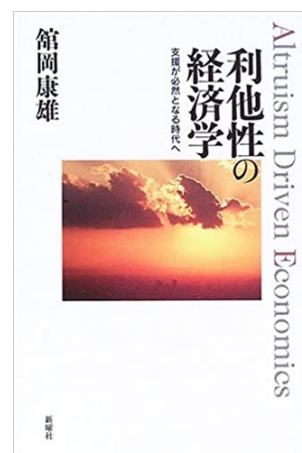
国際ロータリークラブの「社会奉仕に関する 1923 年の声明」は、「超我の奉仕」について、以下のように述べています。

ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—「超我の奉仕」の哲学であり、これは、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践的な倫理原則によるものである。

この考え方は、利己的な欲求と利他的な義務・奉仕とを対立的なものとする考えに基づきつつも、それを超克しようとしています。

この考え方を推し進め、むしろ、利己と利他とを矛盾・対立するものとするのではなく、「社会的動物」としての人間は、利己主義を抑制する方法としての「管理社会」から、一人ひとりが自分の守備範囲を少しばかり他人に奉仕することによって、利己的な考え方を保持したまま、奉仕し合う「支援社会」へと移行させていくことが必要なのです。

このようなロータリークラブの奉仕の精神を高く評価し、自分の守備範囲を少しばかり超えて他人に奉仕することを通じて人類が目的としている平和で豊かな社会へと向かうことができるという「利他性の経済学」（館岡康雄『利他性の経済学—支援が必然となる時代へ—』新曜社（2006/4/1））が、世界的に注目を集めています。



### (2) 国民の義務の実践を支援する社会へ

ロータリークラブの公式標語「超我の奉仕」は、1911年にベンジャミン・フランク・コリンズによって提唱されたものですが、そこでの「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という意味は、奉仕すれば、回り回って結局は得をするという単純な意味ではなく、自分の殻に閉じこもって、自分の仕事だけすればよいという考え方では、実は、経済的な効率性も合理性も実現できない。自分の殻を破って、他人の領域に対して支援することによってのみ、経済的効率性も合理性も実現できるということを意味しているのです。

後に述べるように、他人の領域に属する義務を支援することで、組織全体の効率性と合理性が実現できるというのが、「超我の奉仕」の精神なのです。

このことを国や自治体に拡張すると、政府（地方政府を含む）は、市民の義務について、それを履行できない市民がいる場合には、それを放置するのではなく、「誰一人取り残されない」という精神に則り、義務を支援すべきだということになります。政府とロータリークラブは、市民の義務の支援と市民への奉仕活動を通じて協力し合うべきなのです。

## 2. 国民の義務に対する支援という新しい考え方

以上の点を踏まえるならば、日出ロータリークラブの奉仕活動の究極の目標は、日出町の市民の義務（教育を受けさせる義務（憲法 26 条 2 項）、勤労の義務（憲法 27 条 1 項）、納税の義務（憲法 30 条）、環境に対する義務）を市民が滞りなく履行できる仕組みを構築するよう、町に対して提言することだと、私は考えています。

実は、このことを通してのみ、日本国憲法第 25 条が国民に約束している「健康で文化的な生活を営む」という、国民の基本的な人権を実現することができるのです。

## 3. SDGs の実現を支援しよう

### (1) 貧困をなくそう（クリーンエネルギーの調査と電気代無料）

わが国には、絶対的貧困者（1 日 1.9 ドル（日本円にして約 200 円）未満の生活者）はほとんどいないものも、相対的な貧困者はかなりの率を占めています。

相対的貧困とは、全世帯の所得の中央値の半分以下の生活者をいいます。日本の場合、所得（等価可処分所得）の中央値は、244 万円（2015 年調査）なので、その半分以下の年収 122 万円以下が相対的貧困となります。

厚生労働省の調査によると、日本では、相対的貧困が全人口のうちに占める割合は 15.7%。日本人の約 6 人に 1 人が貧困層に該当する計算になります。

OECD 加盟国の平均は、11.8%（2019 年 8 月）なので、日本は先進国の中でも、相対的貧困の割合がかなり高い国となっています。

貧困の原因は、生存のための費用が高すぎる点にあります。水道代と電気代をゼロにする工夫をすれば、生活は楽になり、非常に多い滞納者をゼロすることも可能です。

日出町には、バイオマス発電、水力発電（水路発電、潮力発電）、風力発電（洋上発電）、太陽光発電等によるクリーンエネルギー源を有しています。

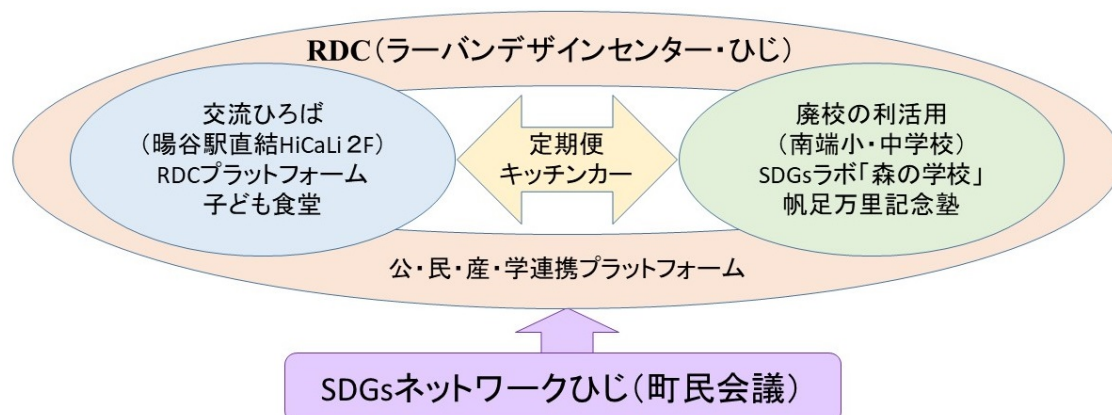
これらの潜在的なエネルギー源を有効に開発し、活用すれば、電気代を無料化することが可能となります。

このための調査研究を日出ロータリークラブで行い、日出町に提言すべきだと思います。

### (2) 飢餓をゼロに（子ども食堂の建設と運営）

わが国では、7 人に 1 人の子どもが相対的貧困に陥っているといわれており、給食だけで一日の栄養を摂取している子ども、給食を姉妹兄弟に分け与えるために、給食を食べずに持ち帰る子どもいるのが現状です。

ですから、日出ロータリークラブの次年度からの計画に、子ども食堂の建設支援、キッチンカーを使った子ども食堂の運営支援を行うべきだと考えており、この抜本的な支援を日出町に提言すべきだと考えています。



### (3) 質の高い教育をみんなに（教員のイエナプラン・オランダ研修への派遣）

質の高い教育をみんなが受けられるためには、教員の質の向上が必要です。今年は、コロナ禍で実現できませんでしたが、コロナ禍が収まった暁には、日出ロータリークラブで実行するイエナプラン・オランダ研修への教員の派遣を強力に推し進めるとともに、日出町への支援を要請すべきだと考えます。

### (4) 働きがいも経済成長も（起業支援）

日本の学生は、卒業後に起業する割合が非常に低いのが特色です。大学で、企業に役に立つ教育を受けていないからです。日本の大企業が行き詰まりを見せている現状において、義業を支援する機関を創設し、日出町で働く若者を増やすべきです。この点も、調査権有を行って日出町に提言すべきだと考えます。

### (5) 住み続けられるまちづくりを（仮想地方通貨発行による財源の確保）

まちづくりには、知恵とお金が必要です。国の補助金を頼るだけでなく、デジタル化され、ブロックチェーンで偽造を防止する地方通貨を発行し、MMTを活用して、国に頼らない財源を創出すべきだと考えています。

## 4. 参考文献

- ・伊藤美佳=齋藤恵（マンガ）『マンガでよくわかるモンテッソーリ教育×ハーバード式子どもの才能の伸ばし方』かんき出版（2020/2/17）
- ・新井紀子『AIに負けない子どもを育てる』東洋経済新報社（2019/9/19）
- ・石川一郎『2020年からの新しい学力』SB新書（2019/9/15）
- ・石戸奈々子編『日本のオンライン教育最前線—アフターコロナの学びを考える』明石書店（2020/10/1）
- ・大川繁子『92歳の現役保育士が伝えたい親子で幸せになる子育て』実務教育出版（2019/9/11）

- ・落合陽一『2030 年の世界地図帳—あたらしい経済と SDGs, 未来への展望—』SB クリエイティブ (2019/11/22)
- ・カイク・ペレルマン (江口三角 訳)『法律家の論理—新しいレトリック』木鐸社 (1986)
- ・加賀山茂『現代民法 学習法入門』信山社 (2007)
- ・加賀山茂「コロナ時代の教育と国民の義務に対する支援の必要性」『法と経営研究第 4 号』信山社 (2021 年 1 月)
- ・寛裕介『持続可能な地域の作り方—未来を育む「人と経済の生態系」のデザイン』英治出版 (2019/5/10)
- ・蟹江憲史『SDGs (持続可能な開発目標)』中公新書 (2020/8/20)
- ・岸見一郎『アドラー心理学入門—よりよい人間関係のために』ベストセラーズ (1999/09)
- ・木村泰子『10 年後の子どもに必要な「見えない学力」の育て方』青春出版 (2020/11/20)
- ・西 剛志『脳科学者が教える子供の自己肯定感は 3・7・10 歳で決まる』PHP 研究所 (2020/4/2)
- ・ドナ・ヒックス (ノ・ジェス (監修), ワークス叔悦 (訳))『Dignity ディグニティ』幻冬舎 (2020/3/2)
- ・平川理恵『クリエイティブな校長になろう—新学習指導要領を実現する校長のマネジメント—』教育開発研究所 (2018/4/6)
- ・福岡伸一『生物と無生物のあいだ』講談社現代新書 (2007/5/20)
- ・福岡伸一『生命と食』岩波ブックレット (2008/8/6)
- ・福岡伸一『できそこないの男たち』光文社新書 (2008/10/20)
- ・福岡伸一『せいめいのはなし』新潮文庫 (2014/11/1)
- ・福岡伸一『新版 動的平衡 1—生命はなぜそこに宿るのか (生命とは何か) —』小学館新書 (2017/6/5)
- ・福岡伸一『新版 動的平衡 2—生命は自由になれるのか (生命はどこから来たのか) —』小学館新書 (2018/10/8)
- ・福岡伸一『動的平衡 3—チャンスは準備された心にもみ降り立つ—』木楽舎 (2017/12/1)
- ・福岡伸一『最後の講義 完全版』主婦の友社 (2020/3/31)
- ・幕内秀夫『子どもをじょうぶにする食事は、時間も手間もかからない』ブックマン社 (2019/10/10)
- ・南博=稲場雅紀『SDGs—危機の時代の羅針盤』岩波新書 (2020/11/20)
- ・宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』新潮新書 (2019/7/25)
- ・諸富祥彦『スマホに負けない子育てのススメ』主婦の友社 (2018/9/30)
- ・リヒテルズ直子『今こそ日本の学校に！イェナプラン実践ガイドブック』教育開発研究所 (2019/9/1)
- ・リヒテルズ直子『手のひらの 5 円玉—私がイェナプランと出会うまで—』ほんの木 (2020/10/21)

- ・ジェレミー・リフキン（柴田裕之訳）『限界費用ゼロ社会—モノのインターネット—と共有型経済の台頭—』NHK 出版（2015/10/27）
- ・ジェレミー・リフキン（柴田裕之=伊藤陽子訳）『スマート・ジャパンへの提言—日本は限界費用ゼロ社会へ備えよ—』NHK 出版（2018/4/25）
- ・L・ランダル・レイ（中野 剛志=松尾 匡・解説, 島倉 原=鈴木 正徳・訳）『MMT 現代貨幣理論入門』東洋経済新報社（2019/8/30）
- ・渡辺信一『AI に負けない「教育」』大修館（2018/8/1）